

idea

ニュースレター「アイデア」

2025.3

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

- 1 | 二言三言 | フォトグラファー 遠藤凌平さん(後編)
- 3 | 団体紹介 | むろね山野草の会
- 5 | 地域紹介 | 宝築自治会(千厩)
- 7 | 企業紹介 | 株式会社 和興ニット岩手(藤沢)
- 8 | 博識社のフクロウ博士 | 地域運営の落とし穴56 事例の取り扱いにご用心
- 9 | センターの自由研究 | 難解・難読地名に挑戦! 第9弾「大原」

今月の表紙

大東町大原の小字名から「難解・難読地名」をピックアップし、市内在住100人(大原在住者除く)へアンケートを実施。正答者が最も少なかったのは、山々に囲まれた平地にある「当摩」でした。(自由研究)



idea

発行 いちのせき市民活動センター
せんまやサテライト 〒021-0881 一関市大町4-29 のはなプラザ4F Tel 0191-26-6400 Fax 0191-26-6415
〒029-0803 一関市千厩町千厩字町149 Tel 0191-48-3735 Fax 0191-48-3736

ホームページ: <https://www.center-i.org/> メール: center-i@tempo.onn.ne.jp

お知らせ

募集

「むろね山野草の会」 会員募集中

本誌「団体紹介」で紹介した「むろね山野草の会」では、一緒に活動する会員を募集しています。主な活動は春の山野草展(5月)と移動研修(年1回)ほか、小学校や市民センターなどの庭木剪定等の地域貢献活動で、室根町外や女性会員も多く在籍しています。性別、居住地、経験等は不問で、花や山野草、盆栽などを育てたり、観たりすることが好きな方であれば、誰でも参加できます。詳しくは下記まで。

活動日・場所: 内容等に応じて異なるため、下記までお問合せください。
会費: 2,000円/年
問合せ: 090-4558-8927(会長・村上) または 0191-64-2347(一関市室根市民センター)

イベント

東山うれし市~2025春~ 開催のお知らせ

一関市東山町の地域活性化イベント「東山うれし市~2025春~」を下記日程で開催します。同イベントは、地域の活性化とまちづくりを企図して実施しています。今年は、マルシェに24ブース、キッチンカーは12台が出店。その他、和紙の紙すき体験やものづくりワークショップ、子どもたちが楽しめる遊び場、ゲイビマンの企画もあります。詳しくは下記まで。

開催日: 2025年3月16日(日)
時間: 10時~16時
入場料: 無料
場所: 東山地域交流センター(東山町長坂字町335-1)及び長坂商店街
問合せ: 0191-47-4525
(一関市東山支所産業建設課内「東山地域商店街賑わいづくり実行委員会事務局」)

募集

NPO法人ティラファーム ボランティア募集

一関市藤沢町を拠点に、障がいや病気を抱えた方へ障害福祉サービス、就労継続支援A型事業を提供する「NPO法人ティラファーム」では、同法人が運営する施設で、利用者と一緒に農作業などをするボランティア(無償)を募集しています(高校生以上)。定休日は土・日曜日、活動時間は9時~16時30分ですが、希望する時間帯のみのボランティアでも可能です。詳しくは下記まで。※交通費は自己負担、昼食は持参です。

ボランティア内容:
同法人の利用者と一緒に農作業などの活動を行います。※シーズンによって作業内容は異なります。
問合せ: 080-1800-7624(担当・沼倉)

情報

NPO法人グッジョブクラブ 「出前教室」承ります

一関市を拠点に、「スポーツを通じ、地域の人々の笑顔と元気をつくる」を合言葉に、「総合型地域スポーツクラブ」として年齢関係なく「自己実現の場」を提供する「NPO法人グッジョブクラブ」では、硬式テニス、幼児体操、レク式体力測定等の出前教室を承っています。詳しくは下記まで。



出前教室内容(種目):
硬式テニス、幼児体操、すずめ踊り、スポーツウエルネス吹矢、ボール遊び、スポーツ玉入れ、レク式体力測定、ユニバーサルスポーツ
料金: 5,000~20,000円程度
※種目や場所によって料金は変動します。
問合せ: 090-3710-1996
(理事長・清田)

イベント

第3回 リメンバー公開ライブ

一関市を拠点に活動するバンド「リメンバー」では、下記日程でイベントを開催します。第1部はリメンバーが奏でる生演奏に合わせ、一般公募で集まった出演者がデュエットやソロで歌います。第2部では同市在住のテノール歌手・石井芳雄氏がゲスト出演し、「白い花の咲く頃」や「北酒場」などを披露します。詳しくは下記まで。

開催日時: 2025年3月20日(祝・木)
(開場) 13時
(開演) 13時30分
場所: 一関文化センター 中ホール
チケット料金: (前売券) 500円
(当日券) 700円
※中学生以下無料。チケットは一関文化センターでも購入できます。
問合せ: 090-3120-8474(事務局・佐藤)

講座

令和6年度 まちづくり入門講座

「まちづくり」に興味・関心のある市民や、実際に関わりのある地域協働体の職員等を対象に、「地域づくり」「地域おこし」の違いを整理し、それぞれにおける「視点」を考える講座を開催します。完全申込制(申込締切: 2025年3月15日(土))。詳しくは下記まで。

日時: 2025年3月22日(土)
10時~15時(昼休憩あり)
場所: のはなプラザ4階共同会議室
講師: 小野寺浩樹
(いちのせき市民活動センター長)
参加料: 無料
定員: 15名(完全申込制/先着順)
問合せ & 申込: 0191-48-3735
(いちのせき市民活動センター せんまやサテライト)

まちの写真展

スタッフがまちの1コマを切り取ります。

作品名 「産直 平吾屋敷」



藤沢町黄海宇白石にある産直「平吾屋敷(令和6年10月オープン)」。有機野菜や焼物等を販売し、現在使用していない昔の道具を陳列棚として活用。焼き菓子販売店「うんぬん」令和7年1月オープン」と駐車場を共有していただきます。ぜひ覗いてみてください!



旧町村別の人口動態等を共有します。

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	53095	-126	24553	-58
花泉	11537	-30	4666	2
川崎	3124	-10	1256	-1
千厩	9448	-35	4067	-11
大東	11339	-35	4811	-10
東山	5639	-16	2260	-2
室根	4218	-12	1801	-5
藤沢	6838	-8	2787	-1
一関市全体	105238	-272	46201	-86
出生数	31	11		

183 /105,238

遠藤 凌平

一関学院高等学校から東京農業大学へ進学。卒業後は秋田県内の企業へ就職し、フィリピンへの語学留学を経て、令和2年に地元へUターン。フリーランスのフォトグラファーとして地元で活動しながら、写真教室や情報発信ツールの講師依頼にも対応している。一関市室根町出身・在住。



令和5年6月号から本誌の表紙写真を担当。写真は、東光山観福寺(一関市舞川)の観音堂にて、本誌令和6年6月号の表紙写真を撮影する様子。

第127回 フォトグラファー 遠藤凌平 × いちのせき市民活動センターセンター長 小野寺浩樹

「地域らしさ」を伝えて残す ～ 地元を出て気づいた「危機感」【後編】～

市内で写真撮影を生業とする企業や個人が多い中、写真教室で講師を務めるなど露出があり、地域から特に親しまれているフォトグラファーの遠藤さん。活動の背景には、地域をつくる根本である「地域らしさ」を残していきたいという想いがあり……。今回は、各地をまわって活動してきた目線から、地元・一関市の未来について考えます(2回シリーズの後編)。

小野寺 地元のアイデンティティが失われていく危機感から、「地域らしさ」という価値を発信・記録していく活動をしている、というお話がありました。

遠藤 はい。ただ、世間の大きな流れは変えられないと思ってます。でも、残しておけば、またいつか復活できるかもしれないし、後からそれらの価値を再発見することができる。完全になくなってしまおうと、復活できなくなってしまうから。

小野寺 郷土芸能など、映像として記録していく流れになっていきますよね。

遠藤 そうですね。永井地区郷土芸能伝承保存会から話を聞いたとき、「昔は娯楽としても親しまれていた」と教えてもらいましたが、現代は娯楽が選り放題ですし、「新しくてみんなが『良い』と言っているもの」に集約されていったのだと思います。伝統芸能は現代のものに比

べたら地味に見えるかもしれませんが、見かけだけじゃなく、中身の方に良さがあると感じています。

小野寺 日本の伝統は、一つひとつに祈りや願いがありますからね。

遠藤 そういった「良さ」や「らしさ」を海外に行ってから初めて気づいて。時代を切り拓いてきた人たちがいるからこそ豊かな国になったわけですが、失ったものもあって……。現在、様々な原因から日本の経済が落ち込んでいくという現実もあり、その危機を自分事として捉えていかないと、地方は特に早い段階で衰退していくと思います。大体の人は、なくなる直前になって「ああ、〇〇つてなくなるんだ」と初めて気づきまきまきやいけな。

小野寺 地域のみで残すというのではなく、地域を守って残すというのは

とかやりますよね。

遠藤 あるあるですね(笑)。「おらほでこいづ作つてんだぞ!」つて。

小野寺 そう、あれが日常的にできると思いますよね。身近にあるものが当たり前すぎて、特別に感じないのかもしれない。「一関といえど」と聞かれたとき、市民のみなさんが「これ!」と自信満々に答えられるようになると思いますよ。

遠藤 一関市は「観光」や「移住・定住の支援」にも力を入れているかと思いますが、地元の人「おらほに何もなし」つて言ってしまう状態なのは、外から来た人にマイナスイメージを与えてしまう。地域間の「垣根」を感じることも多々ありますが、今こそ市全体で連携していくべきだと考えています。

小野寺 「何もなし」ではなくて、当たり前であることに価値を見出していきたいですね。一関市を持続させていくために、改めて地元の価値を認識し、一人一人が後世に残すための努力をしていかなければいけません。

難しくなってきましたよね。マンパワーがなくなってきたというか。

遠藤 それは地元に戻ってきたときに感じましたね。引き継いできたものを全部守ろうとして、みんな疲れ切っていたので、この状況はすぐまずいなと。当事者が疲れ切ってしまうとイベントなどの勢いもなくなり、「だったらもうやめよう」となってしまう。残された人たちがただ苦勞して辛くなるだけにならないように、その人たちが報われるように支援ができればいいなと思っています。

小野寺 「室根神社祭のまつりパ行事(本誌令和6年11月号で紹介)」にしたり、「維持する」というのは想像以上に大変なこと、現在まで残してくれていることに感銘を受けます。

遠藤 これまで守ってきた「お祭り」「伝統芸能」「風習」などが、地元のアイデンティティであり、地元人のベースをつくっているのだと思うので、それを失くして、日本人の平均的な形だけが残るのは違うと考えています。一度倒れて(廃れて)

しまつたら、また起こすのに人や時間、お金がかかってしまうので、危機感を持つてほしい。

小野寺 いますぐに「地域らしさ」が出来上がるわけではなく、その地域が紡いできた歴史などが、その地域らしさをつくっているということですね。昔の人が続けてきた伝統には、生きていく幸せを感じるための要素が強くありました。

遠藤 昔とは暮らし方が違って、「より豊かに生きていくにはどうすればいいか」を考えてしまおう。「生きていく幸せ」よりも上を求めてしまうから、苦しくなったり、何かがおかしくなったりするのだと思うんです。今は、ほとんど餓死もないし、「〇歳までは死なない」と思っている人が多いですね。1日1日を必死に生きていないから「明日でいいや」と先延ばされていく。そうやって生きていくと、色んなものが知らないうちになくなっていきます。

小野寺 今の日本は生きていくことが当たり前を感じる時代なので、祈りや願いの意味が薄くなり、伝統も形骸化し、廃れて

団体紹介

むろね山野草の会

平成20年発足。室根地域を中心に山野草の愛好家が集い、山野草展の開催などによる地域振興を図るとともに、会員間の交流や山野草等に関する研修機会も提供。令和6年度には一関市民憲章推進協議会表彰を受けた。

住所：一関市室根町折壁字大里106-2
TEL：090-4558-8927(会長：村上)

写真：令和6年度「春の山野草展」でのディスプレイ展示。



あせ道の草花にも晴れ舞

「見る人によっては『オライの田んぼで踏んでつと』と言うような草花だったりする。でもそれを鉢に入れるとこれだけきれいになるんだよ、というのが、山野草の楽しみ方の一つですね」と微笑むのは、「むろね山野草の会」3代目会長の村上義一さんです。

村上さんの案内で見学させていただいたのは、毎年5月に2日間開催される同会のメイン事業「春の山野草展（一関市室根市民センター会場）」。令和6年は、同会会員のうち18名281点の出品があり、各日約20人の会員がスタッフを務め、来場者を出迎えました。驚くべきはその来場者数。毎年、約800人（2日間累計）が訪れ、千人を超えた年もあったとか。

県外からの来場者も多く、その理由について「出品数の規模ではなく、『ピツとくるものがある』らしい」と村上さん。その要素と言えるのが、同会がこだわる「化

「見せる」にこだわり、「癒し」を提供

むろね山野草の会

2日ばかりで準備する壮大なディスプレイ展示

粧鉢で飾る」という見せ方です。2階の会場内には大小様々な山野草が展示されますが、その全てが趣深い器に植えられています。瀬戸物（お猪口や小鉢等）や石、木材など、アイデアやセンスが光るものばかりで、山野草の知識がない人でも楽しむことができます。「『きれいに見せよう』ということにこだわっている。こうした展示会の際にみんなと切磋琢磨することで、自然とセンスが良くなり、飾り方を褒められることも多いです」と語る村上さんの言葉通り、この日も「素敵ねえ」という来場者の声を何度も耳にしました。

や小学校の庭木剪定作業、室根山の野草保護活動などの地域貢献活動も行うほか、各種講座の開催、移動研修等、様々な活動に取り組んできました。会員の成長により、当初行っていた会員向け講座の需要が減り、「その分、山野草展で勉強し合う」という同会。副会長の吉田光子さんも「会の発足によって、『誰かに見せたい』という気持ちが出てきました。同じ花でも、人によって咲かせ方や飾り方が違うので、本当に勉強になります」と、山野草展の大切さを語ります。

平成29年に会員数は48名に増え、『むろね山野草の会 創立10周年記念誌』を発行。10年の歩みをまとめました。その後、55名まで会員が増えた時期もありましたが、会員も高齢化し、現在は28名。「他地域を見ると、解散したり、活動が縮小したりする山野草の会も多い。当会は最盛期に比べれば会員数は減りましたが、新入会員もいます。また、会員の半数が女性というのも珍しく、そのおかげで展示会も盛り上がりがあります」と、村上さんは誇らしげに語ります。

この日も、山野草の販売コーナーでは女性陣が明るく元気に接客。自分たちが作ったコケ玉を販売しながら「この売上を活用して、みんなで研修に行

同会が発足するきっかけとなったのは、室根公民館（現室根市民センター）の館長（当時）で現在は同会副会長の小山光正さんが、自身や知人（大東町）の山野草を公民館に展示したことでした。何度か展示を行うと、展示を見た人たちから室根の山野草愛好家情報が集まるように。同時に愛好会立ち上げの機運が高まり、平成20年4月25日、13名の愛好家で会が発足したのです。

愛好家が愛好家をよび 広がる活動

同年、同会として第1回目となる「春の山野草展」を開催。翌年からは公民館との共催となり、「望郷の群舞」もスタートします。また、公民館

Q.山野草の魅力とは？

会長



A. 可愛い 生命力

むらかみ ぎいち
村上 義一さん

会の発足時からの会員（発足時は副会長）。登山好きだったこともあり、30代からの山野草愛好家。特に好きな山野草はトキ草とサギ草。

副会長



A. 愛らしい かれん

よしだ みつこ
吉田 光子さん

村上さん同様発足時からの会員。サクラ草をきっかけに山野草愛好家に。「派手ではなく密かに咲いている感じが好き」なんだとか。※副会長は2名

くのが楽しみ」と笑います。身近な草花を「いかに愛でるか」を楽しむ……。一つひとつは小さな作品ですが、横のつながりで大きな作品となり、地域内外の人たちに癒しを提供していきます。

- Photo



楽しみは移動研修
毎年マイクロボスを借り、花や盆栽、植物の鑑賞へ。複数箇所を巡って目と感性を養います。関東方面に1泊で行くことも！



ミニ門松講習会の様子
過去には盆栽や鉢植え、コケ玉等、様々な講習会を開催。近年は市民センターと共催で市民向け講習会を開催しています。

gallery -



交流を楽しみながら
屋外には山野草の即売コーナーが。購入目的で来るお客様も多く、同会会員がスタッフとして接客しています。



こだわりの鉢と花台
メイン会場に並ぶ山野草たち。鉢の下に敷く花台はかつて同会で制作したものが。販売していた時期もありました。

地域紹介

宝築自治会(奥玉)

千厩町奥玉に位置し、萱刈場、熊ノ巣、此手、弘川の一部、八幡前、宝築、松原の一部、松森の一部、村松、吉立、天梅の一部で構成される。班は9班体制で、63世帯、208人が暮らす。行政区は千厩15区。



左の写真：県道草刈りでの集合写真(令和6年7月)

支え合いが基本の集落

健康で明るい住民生活の確立と、地域の振興発展に寄与することを目的に設立(昭和61年9月)された「宝築(ほうづき)自治会」。同自治会エリアは、県道10号江刺室根線と千厩川が北東側から通り抜け、歴史ある遺跡として「中ノ峠遺跡」「宝築遺跡」等から縄文土器や石器などが出土し、城館跡として「此ノ手館跡」「殿金沢館跡」が存在しています。

集落の拠点は「宝築集落センター」で、昭和55年に建てられたこの施設は、自治会事業だけでなく住民の様々な活動場所となっています。エントランスにはたくさん賞状やトロフィーが飾られ、奥玉体育協会が主催の「奥玉地区ウォークラリー大会」「奥玉地区民ニユーススポーツ大会」では、見事な連携プレーで優秀な成績をおさめてきました。伝統行事の「どんど祭」は、毎年、教育文化庁と子ども会が主体となって準備から

協働を継続していくために

宝築自治会

千厩

元気で明るい集落に

当日の運営まで携わります。同自治会は環境整備活動にも力を入れており、市の委託事業として、中の峠公園の草刈り(年2回)と公園内のトイレ掃除(年4回)を総務部が、県道の草刈り作業は産業部が中心となって活動。「県道に隣接する家が多いので、草刈りのときだけでなく、日頃から各家の協力があるため成り立っています」と語るのは、自治会長の吉田進さん。副自治会長の藤野弘子さんも、「生活に必要なことは、班で動くことが多いです。嫁いで来た当初から、みなさん『宝築自治会』という仲間意識が強いですね」と笑顔で語ります。

毎月開催の「サロンやまびこ会」は、健康づくりやお茶会等で親睦を深めるなど、生きがいづくりを目的として開催。顔を合わせ、おしゃべりを楽しむ同会は、自治会内に住む高齢者の「家の閉じ

こもり予防」の役割もあります。

中心となる活動は、奥玉振興協議会が主催の「あらたま作品展」へ出展する作品づくりです。展示することで「参加者にやりがいを持って制作してもらいたい」という意図があるそう。

千厩地域デマンド型乗合タクシーの乗降場所(一部)や自治会エリア内には花壇が設置され、毎年6月から7月にかけて鮮やかに咲き誇り、道行く人の目を楽しませてくれます。婦人部が主体となって手入れをする「宝築自治会ふれあい花壇」は、令和6年度花いっぱいコンクール地域審査(千厩地域)の一般花壇部門地域の部で奨励賞を受賞しました。さらに、奥玉振興協議会が主催する奥玉地区民芸大会では、婦人部がダンスを披露する機会もあり、女性たちが集落全体の盛り上げ役としても活躍しています。

※1 予約に応じて、利用者の自宅付近(公道上)や、現在は廃止された市営バスの各停留所などで乗降できる。

※2 現在は廃止された市営バス停留所「宝築」の側にある「宝築ユートピアガーデン」は、近隣住民で管理しており、花いっぱいコンクール地域審査千厩地域の一般花壇部門地域の部で、2年連続「最優秀賞」を受賞。令和5年度には市全体審査で「教育長賞」を受賞。

自治会活動の意義

平成8年には、宝築自治会設立10周年を記念して式典が行われ、各年代の事業内容等をまとめて自治会の歩みを振り返る「宝築地方の歩み」を発行しました。

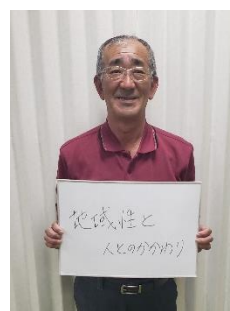
自治会内で開催していた運動会はコロナ禍を機に無くなったそうで、「運動会は前日から準備をして、玉入れや綱引き、リレーなどで盛り上がり、芋煮や老人クラブが作ったサツマイモなどを食べたのが思い出される」と懐かしみます。

副自治会長の千葉一枝さんは、「設立から約40年が経ちましたが、人口減少の波も実感しています。『事業をやる意味』を考えると、無理のない事業の選択をしていかないと立ち行かなくなると思っていて、欲を出さないうで活動していきたい」と語ります。

「他の地域では『自治会を無くしても良いのでは?』と言う話もあります。自治会を無くしてしまつたら、支え合いが必要な高齢者も大変になるし、その家族も大変になる」と危惧しているみなさん。「何かあつたら、近所の人などに気軽に相談できるような集落でありたい。人と人のつながりを大切にしていきたい。次の役員さんに引き継ぐときは、『住民の想い』も一緒に伝えていきたい」と続けます。

Q.集落の自慢は何ですか?

自治会長



A. 地域性と人とのかかわり

よしだ すすむ
吉田 進さん

2期4年目。会計、副自治会長を経て自治会長へ。生まれも育ちも宝築で、役員としてだけでなく、いち住民としても、自治会運営を支えています。

副自治会長



A. 無理せず自然に

ちば かつし
千葉 一枝さん

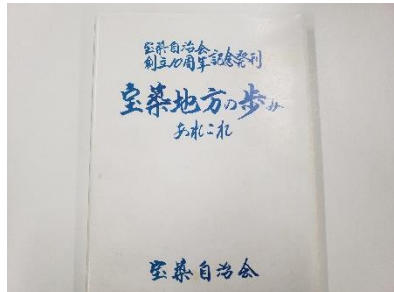
2期4年目。現職も合わせて、約30年間自治会組織の運営に関わっています。趣味はソフトボールとオートバイとのこと。※副自治会長は二人体制。

集落に住む人たちのことを考え、様々な想いを込めて活動する同自治会。自慢の結束力を発揮して、持続可能な自治会活動を目指していきます。

- Photo gallery -



研修会の様子
毎年、親睦会も兼ねて開催しており、今年も17名が参加しました。つながりの大切さを改めて感じる機会になっています。



宝築地方の歩み
宝築自治会創立10周年を記念して発行された記念誌。自治会の成り立ちや、事業などの記録が残されています。



婦人部の活躍
今年の奥玉地区民芸大会では、「ザ・ピーナッツ」の名曲に合わせて踊りを披露。観客を沸かせました。



県道の草刈りの様子
県道10号江刺室根線の草刈り作業(写真は令和6年)。毎年1回、各班から参加して整備に汗を流します。

藤沢 株式会社 和興ニット岩手

「株式会社和興(以下、本社。代表取締役社長 國分博史氏)」の自社工場である「株式会社和興ニット岩手(以下、同社)」は、カジュアルやスポーツウェアを中心とした、婦人服のニット製品をメインに縫製を行う。昭和4年、現代表の曾祖父(初代)がミシン一台から縫製業を始め、現代表の祖父が「國分メリヤス株式会社」を設立(昭和31年)。「和をもって興す」という信念のもと「株式会社和興ニット」へ社名変更を行い(昭和41年)、旧藤沢町で初の誘致企業である同社を設立(昭和43年)。昭和60年に新しい工場を落成(現住所)し、平成5年、本社名を「株式会社和興」へと変更(平成27年)した。

「社員一人ひとりの輪=和」を大切に紡ぎ繋げる

昭和20年代、戦時中の衣服は配給制のもとに置かれていました。戦後は、食料に換えるなどして元々少なかった衣服が極端に不足し、各家庭で古い生地を縫い合わせるなど工夫して補充していたと言われています。昭和30年代には高度成長期を迎え、縫製繊維が数多く市場に出回り、都心近郊の工場生産が盛んになりました。地方の学生らが集団就職として縫製工場に務めることも多く、縫製業界の成長期を迎えます。

昭和40年〜50年代に入ると、縫製工場の地方進出が盛んになり、同時に本社の自社工場として旧藤沢町に同社が設立。専業農家が多かった旧藤沢町においては、季節や気候に左右されない安定した収入が得られることや、女性が活躍できる職場として期待されました。

設立時から町内の廃園した保育施設を活用していた工場は、昭和60年に現住所へ移転し、2階建ての新しい工場に。「最盛期で130人以上の従業員がおり、当時は車の免許がない婦人層も多く、マイクロバスの運行も行っていました。その頃は工場の2階も使用するほど、アパレル

衣服と縫製業の変遷

衣料品の需要が高かった」と語るのは、同社取締役工場長の及川利一さんです。「この業界は、5年〜10年スパンでファッションやアパレルの変動があると感じています。特にニット製品の衣服は、平成10年以降から海外生産に移り、大変厳しいものかなと……。それでも、『我々がこれまで培ってきた縫製の技術を次の世代に継承しなくては』という使命感があります」と続けます。

現在の従業員は20代から70代までの26人。「地元の縫製業にも興味を持つてもらえるように」「将来地元で就職したいと考えるきっかけになるように」という想いから、町内中学校の職業体験を毎年受け入れ、衣服が出来上がる工程を学生が間近で学ぶ機会を大切にしています。

こだわりのものづくりを世界へ発信

熟練スタッフが多数在籍している同社。これまで数多くの国内アパレル

ルブランドの商品を手掛けており、確かな技術と品質はもちろん、細やかな気遣いや着る人への真心がこもった「ものづくり」にこだわっています。「ニット素材は、綿や麻といった天然糸やポリエステルといった合繊など、さまざまな素材が使われており、素材によって機能も多彩です。うちではニット製品をメインに裁断から担当しています」と及川さん。「今の時代はもつと手の込んだものを生産していかなければならない」と考える同社は、縫製業界の時代の変化に合わせ、市内の同じニット製品を扱う別企業と協力しながら、国産のニット製品生産に力を入れています。

現在は、本社にて国産の和紙100%の製品を糸から開発し、自社ブランドとして国内外に発信中。現代の技術で、和紙自体が持つ調湿性や抗菌消臭作用等の機能を活かし、衣服にも転換。地球と人に優しい縫製に尽力しています。



- 1 取締役工場長の及川利一さん。
- 2 現在は1階のみで生産稼働する工場の内観。
- 3 株式会社和興ニット岩手の外観。

DATA
〒029-3405
一関市藤沢町藤沢字大母80
TEL 0191-63-2165
HP <https://www.wakoh.tokyo/company/>

今月のテーマ

地域運営の落とし穴 56
事例の取り扱いにご用心



博識社のフクロウ博士

第72話

事例から何を学ぶか？学びをどう活かすか？

このコラムをはじめから72回。「ここまでよく続けてこられた」とは思いながら、これも日々、現場で様々な体験をさせていただいているおかげですね。すべての現場に感謝！

さて、令和6年度も終わりに近づいてきましたが、この時期になると、視察や研修の依頼が多くなる傾向があります。予算の関係であったり、シーズン中は事業が多かったりするため年度終わりに学ぶ、という理由もあるのかもしれませんが。

我々にも視察の相談がよく来ますが、「ただ視察に行く」のと「目的を持って行く」のでは雲泥の差があるわけで、せっかく行くならしっかり学んで欲しいところ。しかし、なかなかそうはならず、「一閃に視察に行きたいけど、どこか良い所ありますか？」とか、「研修のネタ探しをしてるんだけど、どんなこと話せますか？」など、残念な問い合わせがしばしばあるのも現実です。そんな時は、「順序が逆ですよ」と全てお断りすることにしています。なぜならば、「視察や研修に行くことが目的化」してしまっ、「何を学ぶか」が抜けてしまっているからです。依頼を受ける側にも時間や準備の負担がかかるわけで、「いつでもどうぞ」とは簡単には答えられません。過去に、目的がないまま視察に来られて、「そんなものか」とマイナス評価を受けた経験もあります(これも現場ですね(笑))。

「単純に事例を聞きたい」という声もありますが、たかが事例されど事例です。というのも、事例には生みの苦しみがあり、その事例が生まれるまでのプロセスに価値があるのです。

「事例を聞く」のであれば、どんなことをやっているのかを聞いて終わりではなく、「なぜ、その事例が生まれ、それまでにどんな難所をクリアしてきたのか？」を学び、「それを聞いた自分たちとは何が違うのか、何を参考にすべきなのか？」を考える。視察や研修を企画する人が、それほどの気持ちを持って研修計画を立て、研修に行く人も、自ら考えて学ぶ気持ちが求められます。

例)事例を聞く視察研修会



一関市で地域協働体(RMO)に関する仕組みを考え始めたのは、平成19年。平成の大合併のタイミングでRMOの設立を考える自治体があり、先駆的な事例を参考にさせてもらいながら、一関スタイルのRMOを模索してきました。そして、一関市の施策ができあがり、地域協働体を設立してきたのですが、その当時は事例が少なく、「イメージができないから事例を教えてください！」という声が多かったです。今ではネット検索すると沢山の事例が出てきますが、当時はRMOという言葉もありませんでした。

しかし、事例に導かれることを危惧してあえて紹介せず、考える時間を多く取ることにしました。時々、ふざけて「一関は鎖国しているから」と言ったりしますが、その意味は、「事例に頼ってしまうと自分たちのRMOをどうするのかを考えなくなる可能性があるから」です。

また、一関市が目指しているRMOと同じ目的をもった事例が少ないこともあります。だから、自分たちで考えるしかないのです。今では自分たちで考えた一関市内の事例が多くあるので、遠くの事例を求めなくても、同じ条件で取り組む事例から、学びや気づきができるようになってきました。

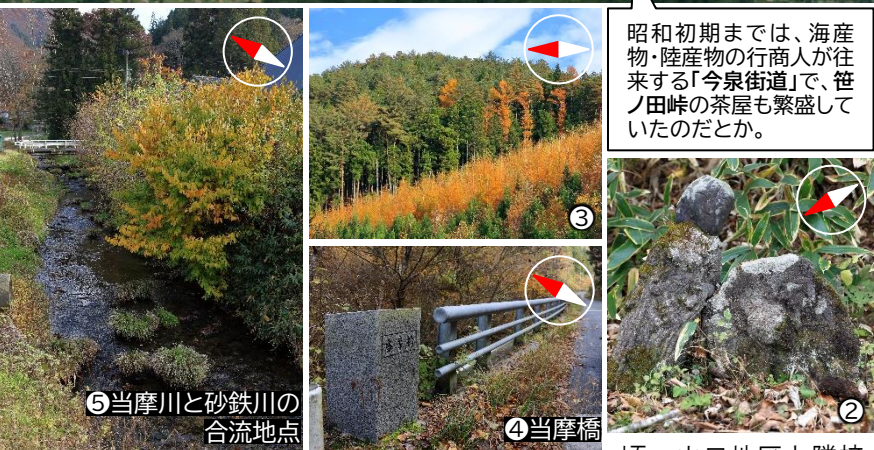
事例の取り扱いを間違えてしまうと、目的とは違った方向に向かうこともあるので注意が必要です。でも、たまには外の世界を見ることも必要ですね。

当摩(たいま)に行ってみた!

今回の「難解・難読地名ランキング」で1位となった、大東町大原の小字名である「当摩」。その当摩集落に在住する、佐藤梅男氏、熊谷一雄氏にガイドをお願いし、現地調査をしてきました!



■ 地理
東側は黒森山(602m)の山頂で、陸前高田市矢作町に接し、西側は高洞谷山(583m)と耳切山(543m)がそびえています。その谷間を当摩川が溪流となって北へ流れ、下内野地区の小字「堰ノ上」で砂鉄川に合流。当摩集落の特に居住地が集まっている所(左写真①付近)から笹ノ田峠(一関市大東町大原地域と陸前高田市矢作町の間にある国道343号線の旧道峠)までは約1.5kmです。



■ 成り立ち
お二人によると、「300年以上前、現在の宮城県気仙沼市八瀬(行政区:上八瀬下区、上八瀬上区)の奥地に身を隠した武士の落人が、それぞれの住処を探す中で、奥地である同集落に落ち着き、暮らし始めたのではないかと聞いている。集落住民の本家や縁故は宮城県や陸前高田市方面が多い」とのこと。明治18年発行の文献には、集落名「當摩(旧字)」と表記されています。

明治22年に旧来の大原村単独で村制施行し、山口地区の当摩班(当摩に6戸、笹ノ田峠付近に2戸、合計8戸)となりました。大正～昭和初期には気仙方面から移住してきた人や、豊富な森林資源を活用すべく林業や炭焼きを生業とする人々(福島県などからも暮らし始め(炭作りをする期間の季節移住者も含む)、集落内の戸数は12戸に増加。昭和9年には当摩線が開設され、ちょうどその頃、山口地区と隣接する下内野地区の区長会議などを経て、同集落は下内野地区に編入しました(笹ノ田峠付近の2戸は山口地区のまま※当時)。

昭和初期までは、海産物・陸産物の行商人が往来する「今泉街道」で、笹ノ田峠の茶屋も繁盛していたのだとか。

当摩の由来を考察!

当センターによる調査段階では、「アイヌ語説」「當麻寺に関連する説」「苗字に関連する説」が当摩の由来としてあがりましたが、現地調査も踏まえると、右頁で紹介した『岩手の地名百科』に記載された説が最も有力なのではないかと考えられます。しかし、当摩の由来を裏付ける、決定的な文献等を見つけることはできていません。

地元の方々は、現在でも「当摩(たいま)」を「ティヤアマ」と発音し、昔は「當摩(旧字)」の表記を使用していたそうですが、由来についてはハッキリと分からないとのこと。詳しい情報をお持ちの方は、ぜひ当センターまでご連絡ください!

■ 人口と分校
現在の同集落は7戸13人。昭和30年頃(全盛期)は13戸94人暮らしていました。

年代	教育の変遷
大正12年	佐藤軍一氏の一室を借り、授業開始(4月～10月) 大原小学校当摩分室開設、生徒数約35人(11月～)
昭和15年	当摩分室を閉校し大原町立大原小学校へ通学
昭和23年	大原町立内野小学校に学区変更
昭和26年	大原町立内野小学校当摩冬季分校開設
昭和30年	摺沢町・興田村・猿沢村・渋民村と合併し、大東町となる
昭和48年	大東町立内野小学校当摩冬季分校閉校
平成17年	6市町村が合併し一関市となる
平成21年	一関市立内野小学校閉校(一関市立大原小学校と統合)

センターの自由研究

地域の「気になること」をセンタースタッフが独自に調査!

ミッション 94 難解・難読地名に挑戦! 第9弾 in 大原

当センタースタッフがピックアップした「難解・難読地名」をテスト形式で100人に出題し、当該地域における「読めない地名ランキング」を勝手に作ってしまう人気企画「難解・難読地名に挑戦!」。

第9弾となる今回の対象地域は大東町の「大原」。今回も「最も読めない地名」に見事選ばれた場所へ実際に行ってきました!

※記載内容はあくまでも当センター独自調査の結果です。

難解 難読 地名ランキング

※センリン住宅地図に掲載されている地名の読み仮名を正解とします(「ザウ/サウ」「ダ/タ」なども区別しています)。

地名(よみがな)	正解者(100人中)
1位 当摩(たいま)	8人
2位 朝米前(あさごめまえ)	14人
3位 雪洞(ぼんぼり)	16人
4位 角明沢(かくみょうざわ)	20人
5位 勝善(しょうぜん)	27人
6位 烏神(からすがみ)	34人
7位 城戸(きと)	35人
8位 有南田(うなだ)	36人
9位 一ノ通(いちのかよう)	38人
10位 笠置(かさおき)	47人

今回の調査には市内の133人(内33人は大原地域在住者)の方に「ご協力をいただきました(調査は令和6年6月～7月にかけて市内の各種団体・企業の方や、講座・会議等でお会いした方などを対象に実施)」。その調査結果から、大原地域在住者33人を除き、ランキングにまとめたものが左記の表です。

今回、なんと圧倒的1位に輝いたのは「当摩」で、正解者は8人のみ。回答記入率はトップでしたが、100名中34の方が「とうま」と回答。「当」という漢字が読めそうで読めず、「あたりめ」や「あたま」と回答する方も思った。

「勝善」の回答には「かつよし」「まさよし」と、人の名前のような回答があり、「有南田」は、「うなだ」「うなんだ」という回答が多く見受けられました。

意外にも2位にランクイン。「まへ」と答える方が多く(27人)、また、「朝米前」は「あさめし」が2位にランクイン。

地域担当者は「『雪洞』が圧倒的1位で難読難読なのでは?」と予想していましたが、正解率が高く、ランキングとしては3位に。

まるで高級酒のような名水!?

当摩集落はかつて隣接の山口地区の一つの班でした(左頁参照)。その山口地区には下記のような伝説があり、当摩集落でも語り継がれています。

五郎作(後の仙台藩士菊池五郎作)は病に伏した親のため、大原の町まで薬と酒を買いに行っていた。ある日、冬の悪天候で町まで行けず悩んでいると、道中で湧水に出会う。一口飲んでみると何とも美味しい水であったため、それを汲んで持ち帰り親に飲ませた。すると「今日の酒は特別に旨い。この寒さの中、親のためにありがたい」と感謝された。この噂を仙台藩5代藩主伊達吉村公が聞きつけ、「たらつねの親につかえし真心は鏡となりて世を照らすなり」と称賛。正徳4年(1714年)五郎作は大藩士となり菊池の姓を称することとなった。また、湧水地は霊泉栗清水と称し、今も有名な一か所となっている。

地元の方の言い伝えより

「当摩」の由来

『岩手の地名百科』には、「『平間(たいらま)』が『たいま』になり、漢字の『当摩』があらわれるようになった。『平間』は、山谷の小平地を表す言葉である」との記載があり、スタッフが実際に現地を訪れてみると、文獻の通り、四方が山に囲まれ、川を挟んで平地が続く土地でした。

「当摩」には、どんな歴史があり、昔の人々はどのように暮らしていたのか……!? 左頁にて現地調査の結果と考察をご紹介します!

※ご協力(上記のほか):一関市大東町大原 下内野自治会 前自治会長 勝部欣一氏 ※参考文献等は当センターホームページにて記載しています。ご了承ください。